

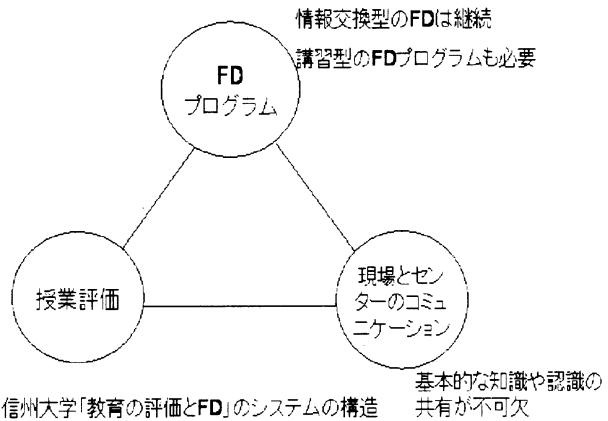
参加型と講習型を組み合わせた FD システムの構築

西垣 順子

(信州大学高等教育システムセンター)

1. 信州大学の「教育の評価と FD」のシステムの構造

信州大学の高等教育システムセンターでは、2002 年度に専任教員が着任して以来、授業のピアレビューを中心とした教育改善システムの構築を試みてきた。分散キャンパスという事情を抱え、各学部の独自性の強さ、新しいシステムや考え方を浸透させることの難しさなどから、信州大学にふさわしい FD のあり方は「参加型」だと考えたためである。



だが、2002 年から始まった授業のピアレビュー（教員相互の授業参観と検討会）の実施経緯から、授業の検討会などでかみ合った議論をするためには、基本的な知識や認識の共有が不可欠であるという結論に至り、図 1 のような 3 つの柱を持つ教育の評価と FD のシステムを構想するに至った（西垣，印刷中）。つまり、互いの授業を公開しあうような情報交換型の FD と、大学の教育目標や学生実態などに関する基本的な認識の共有を目指した講習型を組み合わせた FD システムが必要ということである。

このような背景を踏まえて、本研究では 2004 年度に実施されたふたつの講習型 FD の報告を行い、参加者からの評価なども踏まえた上で、今後の展望について検討する。

2. 講習型 FD のプログラム

教員の間で共通認識を形成するべき事柄として、信州大学の教育理念、学生の実態（平均的にどの程度自主学習をしているか、など）、単位制度実質化に関する理解の 3 つを選定し、以下のふたつのプログラムを立案した。

・理念、目標の理解と学生の実態に関する理解を目指した新任教員研修

4 月に行われる新任教員研修のうち、教育に関する研修の時間として 2 時間の枠を獲得し、以下の 3 つの内容で研修を行った。

①信州大学の学生実態に関するクイズ

信州大学実施の学生生活調査の他、他機関による種々の調査結果を利用して、信州大学の学生の実態に関するクイズを作成した。例えば、「信州大学学生生活実態調査（2001 年）によると、授業時間以外の 1 日当たりの勉強時間が 1 時間未満の学生は全体の何%でしょう」という間に、3 択式で答えるものなど。詳しくは下記の web サイトを参照。

(<http://www.shisutemu.shinshu-u.ac.jp/kenkyuu/bunya/curri/shinken/shinkentop.htm#quiz>)

②大学の教育理念の読み直し

信州大学には各学部の教育理念とは別に全学の教育理念が存在する。内容は誇れるものであるが、文章が長くすっきりした言葉になっていないため、教職員の心に残りにくいという欠点がある。各教員に全学の教育の理念を意識してもらうきっかけを作るために、「理念を自分の言葉で読み替える」というグループ作業を行った。

・単位制度実質化のための学習支援ツールに関する講習会

本学の中期計画には、「シラバスの充実」「厳格な成績評価の実施」「ポートフォリオ評価の導入」「チュートリアルシステムの導入」といった事柄が書かれている。しかし実際には多くの教員がその事実も、そもそも言葉の意味も知らないと推測される。大学の中期計画を理解しないことには参加型や情報交換型のFDの実現は難しいため、これらに関する講習会を実施した。

具体的には、「シラバス作成と成績評価の方法」に関する講習と並んで、繊維学部によるポートフォリオ評価と医学部によるチュートリアル授業の実践報告を行った。ポートフォリオにせよチュートリアルにせよ、センターの側から説明することも不可能ではないが、それではどうしても一般的な話になり臨場感が得られない。本学の中にもいくつか先進的な取り組みがあるので、それらを紹介してもらうという形でプログラムを作成した。

なお、このような学部教員からの講習会の話題提供は、本学のような小規模なセンターによる全学的なFDプログラムの推進にとって有効な手段である。また、講習会ではあるが、参加型のFDという側面も同時に持つことになった。

3. 講習会参加者による評価

上記のそれぞれのFDプログラムの終了後にアンケート調査を実施した。新任教員研修では33名、単位制度実質化講習会では22名の教員から回答を得ることができた。

新任教員研修では、「信大の教育目標について、改めて考えた」との回答が11人、「自分が担当する授業について、改めて考えるきっかけになった」との回答が12人であった。また単位制度実質化講習会でも15名の教員が内容に「満足した」と答え、その理由としてポートフォリオやチュートリアルに関する具体的な情報を得ることができたことを挙げている。このように全体としては、企画者の狙い通りの評価が得られた。

その一方で、新任教員研修では19名もの教員が「具体的な授業の方法、工夫に関する情報交換」を希望するとも答えた。本研究において講習会の対象にしたのはより一般的な教育理念や学生実態に関する理解であったが、教員の側からは他の要求もあることが伺えた。

4. 今後の検討課題

上述の講習会を企画実施する傍らで、授業の相互公開と検討会の試みも続行されている。現時点では講習型プログラムとピアレビューが並行して走っているが、今後両者をどのように関連づけていくかに関する検討が必要である。

<引用文献>

西垣順子 印刷中 授業のピアレビューを中心とする教育改善の試み 京都大学高等教育研究 第10号